

## 戦時性暴力の解明、日独の課題——シンポ開催！

池永記代美（ベルリン・女の会）

すっかり秋の色が濃くなった9月22日、韓国連合と独日平和フォーラムの共催で『慰安婦』の苦しみ、日本の責任——第二次世界大戦における性奴隷制犠牲者の正義回復への道」と題されたシンポジウムがベルリンで開かれました。発言者は韓国のサバイバー金福童さんと韓国挺身隊問題対策協議会代表の尹美香さん、現在イギリスで研究中の林博史さん、戦時性暴力を研究する歴史家のレギーナ・ミュールホイザーさん（ハンブルク学術文化振興財団）、この夏に日本でも講演を行なった「記憶・責任・未来」財団理事会アドバイザーのウータ・ゲルラントさんと大変充実したもので、司会は戦時性暴力に関する国際会議を数多く手がけてきたガビー・ツイプフェルさん（ハンブルク学術文化振興財団）が務めました。日韓だけでなく様々な出身地の人たち約150人で会場は埋め尽くされました。

## 叶えたい金福童さんの願い

導入としてミュールホイザーさんが、加害者が裁かれ被害者が賠償されなければ性暴力は犯罪だという認識が社会に定着しない、そして市民であれ兵士であれ、性暴力の体験はその人の人間関係・家族関係、ひいては社会・文化的生活のあり方を規定し続けており、70年以上前の性暴力の問題に今取り組むことは意義あることだと指摘しました。

続いて金さんの証言。アジアから遠く離れたベルリンでサバイバーの声が聞ける貴重な機会とあって、会場はしんと静まりました。淡々と話す金さんでしたが、慰安所で酒を飲んで死のうとしたのに、酒を吐かされて叶わなかったというエピソード、また前線から戻ってきたばかりの兵士は荒く恐い思いをしたという話が生々しく、聞いていて胸が痛みました。次にスピーチを行なった尹代表は、戦後70年を期して安倍首相が出した談話には「慰安婦」という言葉がなくサバイバーが非常に落胆したことを報告しました。そして「日本軍『慰安婦』問題アジア連帯会議」の提言を引用しながら、「死ぬ前に日本政府の謝罪の声を聞きたい」という金さんの願いを叶えるために国際社会が圧力をかけて欲しいと、会場に向かってアピールしました。



日本で近々出版される予定です（『戦場の性』岩波書店）。戦争と性、軍隊と性という普遍的な問題を考えるために有効な視点を提供してくれる本ですので、一読をお勧めします。

ソウルに留学してサバイバーのインタビューもしたミュールホイザーさん（左）は戦時性暴力に取り組む日韓独の市民や研究者の架け橋でもある。金さん（中央）と司会のツイプフェルさん（右）  
（撮影：梶村太郎）

林さんは金さんの個人的体験を補う形で、慰安所は日本軍が占領したほとんどの地域に設置され、日本、植民地、占領地の女性が慰安婦にされたこと、制度化された慰安所以外に多様な戦時性暴力の形があったことなど、日本軍の性暴力の概要を簡潔に説明し、今までに収集した史料や証言から、日本軍「慰安婦」制度は日本政府や軍が組織的に行なった犯罪で、女性に対する人権侵害だったと明言しました。この問題を研究する歴史家が日本に何人ぐらいいるのか？ という質問に林さんが10人に満たないと答えると、会場から驚きの声があがりました。多くの市民の協力が研究を支えているとの林さんのコメントを記しておきたいと思います。

## 市民の意識変化が鍵

国際社会からの圧力は、「慰安婦」問題解決にどれだけ貢献できるのでしょうか？ ゲルラントさんがドイツで強制労働の被害者への補償が実現するにあたって、ドイツ企業に対する集団訴訟の動きなどの外圧が重要な役割を果たしたが、国内にも強制労働被害者がナチズムの被害者であるという認識が広まり、当時の政権が補償支払いに向けての立法措置に踏み切ったと語ったことが、私には印象的でした。市民一人一人の意識の変化がなければ、過去ときちんと対峙することはできません。そんなドイツでもゲルラントさんによると過去との取り組みは「穴だらけ」で、だからこそこどこにどんな穴があるのか常に検証し、修繕していくことが必要だと訴えました。彼女が一つの「穴」として指摘したのは、第二次世界大戦中の性暴力の問題です。この点はミュールホイザーさんも触れており、ドイツ人女性の被害について認識はあるがその実態はまだ十分研究されておらず、ましてやドイツ兵の犯した性暴力についてはほぼ無関心であった、しかし性暴力は抵抗運動の中にもあった戦勝国の兵士も犯した、第二次世界大戦に参加したすべての国はこの問題に取り組み、被害者の正義回復に努めるべきだとアピールしました。対ソ戦におけるドイツ兵の性行動について研究したミュールホイザーさんの著書が